

市街化に伴う都市河川の変遷と現状

——神田川水系を事例として——

山本貴子

東京の中小河川は、昭和30年代からの急激な人口増加と土地利用の高度化などにより、「都市型水害」が頻発するようになった。このような水害に対して、どのような治水対策がなされているのか、そして地域住民は、河川に対してどのような要望をもっているのかを、東京都内の中小河川の中でも、東京のいろいろな苦悩を一身に背負っている神田川水系について考えていく。

神田川は、三鷹市にある井の頭池に源を発し、中流部で支流である善福寺川および妙正寺川と合流し、新宿・豊島・文京の区境を流下しながら、JR水道橋駅付近で日本橋川を分流して、さらに東流して台東区柳橋付近で隅田川に注いでいる。その流域面積は約105km²、流路総延長は約24.6kmと、東京都区部の中小河川としては最大の集水面積を持つ河川である。

神田川流域は、都心に近接していること、また、そのほぼ中央を貫通している現JR中央線が大正初期にはすでに開通していたことなどの好条件もあって、東京近郊の主要な住宅地として、比較的早い時期から発展してきた。

このような流域の都市化は、雨水の浸透域や遊水機能の減少を招き、河川の洪水負担を大きくさせ、都市型水害の大きな原因となった。治水対策として、神田川においては、護岸改修工事や分水路の建設、調節池などの事業が実施され、水害の早期解消・軽減に努めている。

そのような中、近年になって、神田川流域の地域住民の、水に親しみたいという声が高まり、河川における親水機能の整備が要求されるようになった。

地域別に見ると、上流地域において、その傾向が顕著である。これはやはり、沿川が住宅地になっていることが大きな理由であると考えられる。ところが、この地域は流域内でも水害の常襲地域

であるため、行政側としては、親水性の追及よりも水害対策のための事業を進めざるを得ない現状である。

中流・下流地域においては、地域住民が河川に対して無関心であった。この理由として様々なことが考えられるが、主なものとしては、川沿いに住宅が少なくなっていることや、河川に関する問題よりもっと深刻な問題が数多くあるということが考えられる。新宿区・文京区・千代田区においては、住宅問題や高齢者問題、道路交通問題などへの対処を望む声が高かった。しかしながら、下流地域も隅田川合流点が近付くと、川幅も広くなり、川らしさが感じられ、橋のたもとには橋詰広場が設置され、住民にうまく利用されているところもある。このような橋詰広場は、治水・親水の両機能を兼ね備えているといえよう。本来、治水の対象である降雨は、不確定な自然現象であり、また、流域の状況も変化するため、水害の発生を完全になくすことは極めて難しいと言える。かつ、現状における東京の河川は、都市の中の河川という制約を受けながら、洪水時の排水を速やかに行う施設を求め続けてきたため、こうした河川に治水機能以外の機能を付与することは背反するものを求めることになる。

したがって、治水対策を推進するなかで、潤いや安らぎをもたらす親水機能をいかに調和させるかを考えなければならない。そのために行政側は、情報や知識を提供し、住民側は、河川の現状や今後負担すべきものなど、河川に対する深い理解を持つようとしなければならない。つまり、治水の安全度を向上させつつ、川が本来的に持つ魅力や首都東京ならではの魅力を創造することが、神田川を含む東京の河川の課題であるといえるであろう。